トゲ

牧野　剛

廣松渉氏が死去されて、既に三年の歳月が流れ去った。私の記憶の中の氏の像も、たった三年の間に、少しずつ変貌し始めており、デフォルメは激しくなっているように思われる。もうどのように意識を集中しても、歴史の彼方に沈んで消えて行った部分は、再び闇の中から浮び上ってこないように思われる……。ここにそれを少しずつ思い出して、廣松氏追悼の為、書き記して置く。

一九九三年の春、廣松氏から連絡があり、昔、私たち（八木さんと私）が連名で出した手紙の内容が「生きているか」と問われた。その内容は、氏が「もし大学をやめることがあるならば、河合塾に入れるように、私たちが努力する」というものであった。

私は、当然にも内容は「生きて」おり、喜んで河合文教研（河合文化教育研究所）へ迎えるよう塾内工作をする旨を伝えた。廣松氏は「三月に六十歳で、東大を停年するにあたり、私立大から誘われているが、河合塾に行きたい。君たちの提案からは随分時間が経っているが、私は九州の男なので、あの事は、トゲのようにささっており、いつも気になっていたが、今回それを抜きたい」と言われた。丁度、文教研には、木村敏、谷川道雄、中川久定の各氏も来られることに話が進んでおり、その点でも氏のこの提案は、極めてタイムリーであったのである。

この話には、もう一昔前の、前史、つまり「あの事」がある。六〇年代末、私の通っていた名古屋大学も例にもれず闘争が続いたが、いわゆる全共闘の学生・大学院生であった私たちは、七〇年代始め、大学闘争の敗北の後、〝造反教官〟の廣松氏らと共に大学を去った。大学闘争をめぐる戦術や路線の問題で氏と対立することの多かった私は、しかし、大学闘争の終焉に殉じ、大学を去る廣松氏を潔ぎよいと思ってみていたことは確かであった。が、その数年後、廣松氏が東大の教官になられると聞いたとき、あの『ドイツ・イデオロギー』の精緻な校訂によって、学界にも斯界にもその名をとどろかした氏を、大学が捨てては置かぬのは当然だという思いと同時に、既成の大学へ戻ることについて何か一言言わずにはおられないという思いが交錯した。そして、八木さんと二人で、氏に「東大教官辞任を勧告する」手紙を出すこととなったのである。

今から考えれば、その手紙は氏の事情など考えない傲慢なものであり、若さ故の愚かな行為であった。その時はそれなりに本気であり、先に書いた提案を、「大学解体を唱えた者が、大学教官になることは矛盾ではないのか」という論と共に、廣松氏に突きつけたのである。氏は、長い巻紙の手紙でやんわりと私たちの提案を拒否された。そのことは、名古屋の廣松派と目されていた八木さんや小林敏明氏たちにとっては、一種の親離れの儀式でもあったと思う。

そんなことはあったが、東大の教官になられてからの廣松氏とも度々出会うことになった。河合塾の東京の講師を紹介していただいたり、サテライトでの私の授業に出演していただいて「読書について」語っていただいたりした。又、谷川・中川氏との三人で、河合塾の浪人生に六時間にも及ぶ、大講演会をやっていただいたこともある。。そして、私自身の廣松派の研究会への参加や、名古屋ウニタの〝廣松論〟の出版にも協力した。又、『情況』の古賀さんたちと作り上げた、〝ＰＫＯに反対し堂々と一歩を歩く予備校教師の会〟に、廣松氏も参加され、若い人たちを前に、廣松節の快気炎を上げられたのも、なつかしい思い出である。又、新宿の街頭で、いいだもも氏と偶然に会った折、廣松氏がいいだ氏に、「この男が、六〇年代に、名古屋を騒がせていた中心人物」などと、皮肉も込めて紹介されて困ったことも思い出される……。全体には屈託ない廣松氏であったが、今から考えれば、「あの事」のトゲは確実に氏を痛めつけていたのではないか。

いずれにしても、既に廣松氏の肉体は病気に侵かされており、常に、生命の危機を孕んでいることも小林氏から知らされていた。九三年の始めには、その小林氏が、個人的な事情から、河合塾を離れており、本来なら氏が聞くべき河合塾への転入の話を廣松氏から私が直接に告げられたことが、一つのいやな予感を私にもたらした。それは、「病気がよくないのではないか」ということと、「氏は自分の一生に、一つの結末を付けようとしているのではないか」ということである。そして、それは的中してしまったのである。

実際、氏の文教研入りと仕事の内容を検討するために河合塾で会談した折、ひさしぶりに会う廣松氏は、何と酸素吸入器を持ってやって来られ、しかも顔色が考えていた以上に悪かった。やはり、的中した、のである。そして、訃報。混乱、葬式。……。そのように私は、氏が、仕事半ばにして冥界に旅立れたその直接の原因は、かなりの度合において、ひょっとすれば、私がかってに、「あのトゲ」を抜いてしまうことに同意したことにあるのではないかと思っており、何か負い目を感じている。

さて、話は変わるが廣松氏は、門松暁鐘のペンネームで『共産主義』に「疎外革命論批判・序説」を書かれた六〇年代中期、既に、新左翼運動の理論家として夙に知られていた。ただ、学生運動史を慎重に繙けば、全学連の立命館

リンチ事件や、中村光男氏との「戦後学生運動史」の著者の一人でもあり、早くからの活動家・理論家の一人であることは分かる。そして、革共同との党派闘争に結着を着けるため「疎外革命論批判」をマルクスの著書の中で証明すべく、それまで編集がみだれているという噂のあった、『ドイツ・イデオロギー』に独特の校訂をして見せた、特異な少数派運動家で哲学者であった。しかし、〈名工大―名大〉の教官という名古屋時代は、多くの学生をその博識で魅惑し独特の廣松節でうならせ、学生運動に理解ある少壮哲学者として活躍した初期と、全共闘の断固たる支持者つまり〝造反教官〟としての後期とにわかれる。その時期のエピソードを一つ。

一九六七年十一月十二日、第二回目の佐藤首相訪米阻止「羽田闘争」は、第一回目の十月八日、訪ベトナム阻止「羽田闘争」で、京大生山崎君が死んだこともあって、かなりの緊張が大学周辺を覆っていた。私たち名古屋の学生運動グループも百人弱羽田に動員するつもりであったが、交通費さえない。「学生団体割引き」で交通費を半額にすることを思い着いたのであったが、これには引率者の教師の印がいる。考えたあげく、名大教官廣松氏に名目的な引率者になってもらおうと決め、私が話に行ったが、やんわりと拒否された(これが氏の常であったが)。すごすごと下宿に帰ったら、すぐに文学部仏文の教官新村猛氏から電話があって、引率者として印をつくことを引き受けてもらえることになった。勿論、これは廣松氏の配慮である。これが、氏のやり方の一面を表わしている。廣松氏は、名古屋時代の初期は、こうしたやり方を多くとられたが、表面上の、ある種の慇懃な拒否的態度と、裏にまわっての配慮は、いたるところで氏の周辺には見られるものであり、氏の人生の、氏一流の、処し方であるように思われる。そして後期は、学生たちが見てもはらはらするような、しかも、あまり政治家としてうまくない(?)立回りで、真正面からの〝造反教官〟として闘い続けられた。

こう見てくると、「廣松氏は政治をやらずに哲学だけに集中するべきだった」という意見もあるらしいが、氏にとってみれば、「政治」と「哲学」は自分の両輪であり、どちらかを捨てることは、自分を捨てることに近かったに違いない。まるで私たちの手紙の文言がトゲのように氏を苦しめ、そしてひょっとしたら氏をふるい立たせたかもしれないように、氏は、未完の夢たる、アジア革命の夢を「政治」のトゲとし、九州にこだわり、自分の痛みとして、バネとして、「哲学」を創り永遠の彼方に旅立って行ったのではないか。

（まきの・つよし　河合塾講師）

廣松 渉 著作集

月報16

廣松さんの業績と生い立ち　立松弘孝
廣松渉先生から学んだこと　大澤真幸
トゲ　牧野剛

第十六巻
1997年9月
岩波書店